

三つの思い出



佐々木久春

兄のこと

開戦の昭和十六年十二月八日は、紀元二六〇〇年の奉祝の翌年で、世の中全体に、ある種の高ぶりがあることを子どもながらに感じていた。だから昭和十七年の元旦に両親、兄と、家の裏山の愛宕神社へ

参拝した折の両親の、いやに真面目な緊張した面持ちを今も忘れられない。

昭和十六年は兄が中学一年生だからまさに軍国少年で、五つ違いの私は小学校二年生、軍国少年第二世代とでも言うところであつたらう。真珠湾攻撃の映画に興奮し、日本人をいたぶるペンチを持っていた

かつい目鼻、紅毛の鬼畜米英のポスターにおののいた。

昭和十八年六月、兄は仙台一中三年生の時に、憧れの少年航空隊に入った。十五歳の少年は、目を輝かして同期入隊の少年たちと仙台駅前の広場からプラットホームへ入っていく。見送り人は近づけないままに我が子、我が兄をさがす。少年たちの中に我が子を見つけた母は私に、ああハンカチを忘れてきた、これをと行ってちり紙を手渡した。遠くになって行く兄に白い紙を夢中になって振る母に、私はとても深い悲しみというものを感じた。

昭和十九年戦況は厳しく、土浦にいる兄に面会することはできなかつた。しかし、その手はあつて、はがきの欄外に黒点をつけて何月何日何時という暗号で親子四人は郷土の先輩だったT分隊士の借りていた家で首尾よく会うことができた。二回目もその

手を使ったのだが、あいにく会う日の朝に空襲警報が出てその日は会えなかつた。土浦の駅で帰りの夜行列車を待つのは長く感じられた。駅のベンチに横になっていた私は怒声に目を覚ました。少国民ともあろうものが人々の面前で寝るとは何事か、という海軍士官の声であつた。もちろん十一歳の少年は飛び起きたが、いったい何故少国民が駅のベンチで横になっていけないのか、今もってわからない。父も母も何も言わなかつたし、周囲の誰一人、何も言わず粘土細工のようになっていたことは、印象に残っている。私が背ばかり高くせん病質でひよろひよろしていたのが士官の目には気に入らなかつたのかもしれない。

小学校落第生

私は小学校を七年やった。病院では初診の先生

が、おう見事な体格だと笑うほどであった。母の、女だけの姉妹五人中もつとも年かさの子であった兄は、親戚の注目を浴び、可愛がられる代わりに、父の教育も厳しかったようだ。病弱ということもあつたかもしれない、小学校に入つてもしょっちゅう寝小便をして私は父の期待と鞭の圏外にあつた。帝國大学を苦学して卒業し婚に入つて図書館司書をしていた父が、夕食後兄に夜遅くまで勉強を教えていたその傍に蒲団をしいていつも私は下から兄たちの顔を見ながら眠りに入つた。

五歳のとき祖母の家に遊びに行つていて、犬に追いかけられて腰を打つとことがあつた。学校に入つて寝違えて腰が痛く立てなかつたときに、家人はあの時の腰の「うちみ」のせいだ、と言う。それ以来学校に行きたくないときはだいたいこれが役に立つた。いわゆる不登校児だったのでらう。のんび



りしてたいていのことは放任主義だった母が、この何か理由をつけて休もうとする事に対しては厳しかった。玄関の外へ、表通りへ、ほうきをもって追いかけてきた。

これは母の都合があつたかもしれない。私が学校に上がる前、母は午前から私を連れて出かけた。遠回りして途中「えちゃ」と言うところに寄つた。お茶を買つたのだな、と思つた。そして活動写真を観て、何か食べて帰つた。これは父や兄に黙っているように、と言うことで約束は固く守られた。「えちゃ」は、高校時分になつてわかつた。ワ行の

「彖」と思ったのは「志」の行書体だったのだ、「ちゃ」という拗音は戦前のこととて「ちや」と書いて「ちや」とも「ちゃ」とも読んだ。また、母の行動は、泥酔して一夜にして月給を使い尽くした酒癖の悪い父への腹いせであったことは、のちに母が話してくれた。

話はやや横道にそれたが、四年生のときジフテリヤが原因で（どうも医者 of 誤診だったようだが）通院し、なおつてもその後はぶらぶら過ごすことができるといふなんとも嬉しいことになった。ふだんは寝ている。週に三回ほど医院に行く。小学校はの上まで二十分ほどかかったが、医者までは反対の町のほうへ三十分以上かかる。学校とは逆のほうへ、朝日を浴びて行く、帰りは夢多い模型飛行機屋、何でも見られる本屋、じいさんが巧みに歯を入れる下駄屋など、たっぷり時間をかけて見て、家に帰れば

床におさまり昼のことをうっとりと思い出す、という楽しい日々を送った。

そして、昭和二十年になった。三月、父は旧制山形高校時代の友人が父の故郷である山形県の開拓農場に勤めていて、その学科を引き受けてくれないかということ、仙台も戦雲怪しく、子どもの健康、日々の糧食等を考え疎開ということになった。

仙台市向山小学校から山形県北村山郡亀井田村（現大石田町）の小学校へ転校して五年生をもう一度やった。

山形疎開

とても快適だった。何でも分かるのだ。急に秀才になってしまった。五年生はほとんど学校に行っていないなかったのに、この年頃の一年の自然成長は大きかったのだろうか、繰り返しの五年生は何でも理解

できた。転校先の校長先生は六年生でもいいですよ
と言って下さったのだが、父は早生まれですからも
う一度五年生をやらせてください、いいな久春、と
いうことで六年次五年生の秀才生活が始まったの
だ。

亀井田村は大石田町に隣接し、最上川をはさんで
東西に集落が散在する。私の住んだ海谷（かいや）
に本校がありその南が岩ヶ袋、北が鷹巣、本校に通
う。一学年合わせて五十人ほどのクラスであった。
これら三集落は奥羽本線と最上川の流れにはさまれ
て南北に連なる。川向かいに川前、大浦等、その向
こうの大高根の山中にもう一つの次年子（ずねご）
の集落があつて、村はいくつかの分校を持ってい
た。

大石田は、後に思えば古くは奥の細道芭蕉ゆかり
の地であり、私が疎開していたそのとき斎藤茂吉が

住んでいたのであつた。

夏は猛烈に暑く、冬は雪が二メートルほど積も
る。疎開の当初は農家の小屋の二階が座敷になつて
いて、そこに住み二箇月ほど経つて公舎に移つた。

そこは、村人もあきらめた原野で、福原村に接する
亀井田村の東側にあつた。大高根修練農場とセット
になつていて、修了した紅顔の少年たちは満蒙青少
年開拓義勇軍の持ち駒になつた。その大もとが加藤
完治の内原訓練所であることは、後で知つたことで
はなく当時私が確か知つていたことだと思われるか
ら、高らかに喧伝されていた事なのであろう。



その原っぱから独りで学校に通うのは、とても好きだった。仙台の病院帰りの街をぶらぶらするのと同じ感じだった。ただここは美しかった。冬、かなたに鳥海山と月山が見え、広大なしかしやさしい茜色のパノラマをつくった。晩い春に芽吹いた唐松林が続く。少年にもものつびきならない美の陶醉を迫った。梅雨の頃に原野の道端にどうしてできたか知らないが芝のくぼみにいくつもいくつも水溜まりができる、そこにそれぞれ思いを込めて木片を削った舟を走らせる。遠いかなたへの、それが何かはわからないが夢が広がっていった。山形の盆地の夏はいやだった。犬のようにごろごろしていた。秋は食べ物があって大好き。そして冬が来て、毎日「長靴スキー」をした。

この生活で私にはもう一つの生活様式が生まれた。独りぶらぶらの良さもさることながら、しだい

に子ども集団の行動もたのしくなってきたのである。三集落から通学する児童は、自ずと三集団をつくっていた。ガキ大将以下、いじめられっ子まで、役割の分担がある。その中で、この新入り秀才は新しく設けられた海谷集落の知将として別格の地位につくことができた。これまで味わった事の無い、甘味があった。

冬、降り積もった雪も二月過ぎには表面が溶け、夜のうちに凍る。それを堅雪（かたゆき）というが、こうなれば晴天の日でも午前十時位までならどこまでも行ける。スキーをはいて、林の木の幹の周囲が溶けて地表までウロになった所に野ウサギが潜んでいるはず、ウサギへめ（「へめる」は、捕まえるの意）にでかける。春過ぎには木々にヒワが巣をつくり卵を生む。ヒナが孵った頃、木に登って巣ごとヒナをいただいてくる。めいめい缶詰めの空き缶

に、とつて来た巢を入れ、口をしぼれる布袋に入れて、学校に持って行って休み時間にすり餌を与えては、見せ合つて自慢する。そのほかザコへめ、タニシとり、水浴び等、遊びの種は尽きない。

また、学校が畑と田んぼを持っていて、一通り農作業をやつた。畑の収穫でイモ煮会をやるのも楽しかつた。軒の高さまで雪に閉じこめられるので五箇月分の木炭を、中学年以上の児童が皆ミノを着て、最上川を渡り、遠く大高根山中の次年子の集落まで運びに行く。

こんな事をしていゝうちに、ひよろひよろ、せん病質の少年は、丈夫になつていった。昭和二十四年春、仙台の中学に戻るまでには体力もついた。秀才も仙台に戻ればみじめなものだったが、復員して復学した兄の特訓に泣きながら頑張ることのできる気力と体力がいつのまにか、そなわつていたようであ



る。父は要領悪く、県が変われば恩給をもらう為の、勤務年数が途切れる事も知らなかつた。何も残してやれないが、おまえには丈夫な体だけは残せたと思つ、と晩年酔えば父が幾度となく口にした言葉だが、私もまったくそうだと思つている。

(秋田県立大学)